

北海道東部、阿寒湖周辺におけるクマゲラの生息状況

橋 本 正 雄*

Records of Black Woodpecker *Dryocopus martius martius* around Lake Akan, Eastern Hokkaido

Masao Hashimoto*

Censuses on Black Woodpecker were carried out around Lake Akan, Eastern Hokkaido, from 1984 to 1988. The figure, calls, nesting trees and feeding trees of Black Woodpecker were recorded in the 27 places around Lake Akan. The 8 nesting trees including 3 recent nesting holes were found. Only one adult was observed, in the 12 places the calls were heard and the drummings were recorded in the 2 places. In view of the results of censuses, it is thought that the 10 or more pairs of Black Woodpecker inhabit around Lake Akan.

はじめに

クマゲラ (*Dryocopus martius martius*) は北海道を代表する鳥であり、1965年5月12日、国の天然記念物の指定を受けている希少種である。北海道と本州の動物相の違いを示す生物境界線としてブレイクストン線が有名であるが、これは1880年に T.W. Blakiston と H. Pryer が主として鳥類の分布の違いから提唱したものである。クマゲラは1934年、川口係次郎氏によって秋田県の八幡平国有林で1羽捕獲されるまで北海道にのみ生息するといわれ、ブレイクストン線の重要な根拠となった種の一つである。

かねてから北海道東部に位置する阿寒湖周辺は北海道有数のクマゲラ生息地といわれてきたが、これまでその生息状況については殆ど報告が無い。筆者は1984年から1988年にかけて阿寒湖周辺の鳥類相調査を実施し(橋本1987)、その間にクマゲラの生息についていくらか知見を得ることができたので報告する。なお、調査にあたっては前田一歩園財団より多大な便宜をいただいた。

クマゲラの分布等について

1. 分 布

本種はキツツキ類では最大型のもので、生息域で3亜種に分類されている。*Dryocopus martius pinetorum* はヨーロッパから西ポーランド、北スペイン、バルカン、コーカサス、北イランまで、*D. martius martius* はスカンジナビア、バルト海側ソビエト、シベリアからオホーツク海までの針葉樹林、南ではキルギス、アルタイ山脈、

モンゴル、コーカサス、小アジア、サハリン、千島列島、北海道まで、*D. martius khamnensis* はクブアンガアからチベットまでの西中国に隔離分布する。

日本では北海道と秋田県に生息する。小笠原(1988)によると、本州での生息記録について日光(?) (1685年)、会津(1685年)、仙台および山形県左沢(1803年：小野蘭山)、そして秋田県からは1920年(森吉山)、1930年(八幡平：仁部富之助 1937)、1934年(金足：清棲幸保 1954)、1935年(八幡平、2羽捕獲：川口係二郎)、1937年(大平山：仁部富之助)などがある。さらに1970年に秋田県大平湖周辺で庄司国千代氏によって営巢中の親鳥が発見され、本州での繁殖が確認された(小笠原 1977年)。

2. 生 態

クマゲラは平地または山地の大木の多い森林に生息し、樹幹の地上はほぼ5m以下に嘴で穴をあけたり、枯木を突き壊すなどしてアリやその他の虫を捕食する。北海道では餌のほとんどはムネアカオオアリなどのアリであるといわれる。

繁殖のためには自然林で200~300haの広い縄張りを持つ(有澤 1974)。巢穴は大木の地上6~12mの高さに、雌雄が8~17日にかけて掘る。巢穴は入口が縦12~15cm、幅約8cm、深さ30~55cm、巢穴内の最大部直径15~28cmぐらいで、産座には巢材を使用しない。ときには、前年の古巣を利用する。産卵期は4月から6月ころまでで、純白卵(31~37.5×22~27mm)を4~6個産み、雌雄交代で14~16日抱卵するとフ化し、その後24~28日で巣立

* 釧路市立博物館 (Kushiro City Museum, Kushiro, Hokkaido)

ちする。

クマゲラは、生態学的意味をもつ4種類(Kijah音、Kürr音、Kijäk音、Kwih音)の鳴声をもつ(小笠原 1988)。Kijah(キヤー)音はねぐら木や営巣木及びそれらの周辺でよく聞かれ、基本的音声のうちでも最も頻繁に発せられる音声である。本音声は自分がどこにいるかを番いの相手或いは巣立ちビナ等に伝える役割を持つといわれる。Kürr(コロ コロ……)音はもっぱら飛翔時に発せられ、連続した高い音声である。営巣木やねぐら木に帰る時によく聞かれ、自分が飛んでいく方向を相手(番いや巣立ちビナなど)に伝達するに役立つといわれる。Kijäk(クックレア)音はきわめて低く、やわらかい音声で、番い間の或いは親鳥と巣立ちビナの間での交信に利用されるといわれる。Kwih(クイッ)音は10~20個の連続したメロディアスな音声で、特に巣立ち近いヒナが本音を用いて親鳥を呼ぶのにつかわれ、番い間、親子間或いは親と巣立ちビナとの間での交信に役立つといわれる。このほか、縄張りの維持、番い相手の誘因、巣穴の見せかけ、性的刺激などに関連して、2~8月の間にはDrummingを盛んに行なう。

阿寒湖周辺の生息状況

1. 調査地の概要と調査方法

阿寒湖は釧路市の北約50kmにあり、阿寒国立公園の主要な部分を占めている。阿寒湖は火山性の湖で、周囲23km、面積12.7km²、最大深度44.8m、水面の標高は420mである。湖周辺は、湖畔の温泉街を除くと、エゾマツ、トドマツ、カツラ、シナノキなどの保存のよい針広混交林におおわれている。

これまで、調査は1984~1988年にかけ阿寒湖とその周辺部の広い範囲で行なってきたが、主には阿寒湖西岸の林道沿い、阿寒湖北端のイベシベツ川河口よりパンケトーにかけての林道沿い、雄阿寒岳と雌阿寒岳の登山道沿いなどである。阿寒湖及びパンケトーでは、舟を用いて湖上からの調査も行なっている。

調査では、クマゲラの生息状況を示すものとして姿・鳴声(Drummingを含む)、営巣木、採餌痕についての確認を行ない、それぞれの確認日時、場所を記録した。なお、複数の確認点がそれぞれ200~300m程度しか離れていない場合には、それらの記録は同一地点のものとして処理した。

2. 調査結果

阿寒湖周辺の27地点において、クマゲラの生息を示すものを確認した(Table 1, Fig.1)。営巣木は、8地点にて8本確認した。その内、確認した年もしくはその前年

に営巣に利用されたと判断できる新しい巣穴のあるものが3本、それ以前の古い巣穴のものが5本であった。営巣木の樹種はハルニレ(1本:地点4)、ダケカンバ(1本:地点5)、シナノキ(2本:地点8、27)、ミズナラ(1本:地点18)、トドマツ(2本:地点3、25)、広葉樹類(1本:地点21)であった。営巣木には胸高直径が約50~80cm、樹高が15~20mに達する大木が利用されていた。8本の営巣木中7本では巣穴は1個である。しかし、残りの1本(シナノキ:直径約50cm、高さ15m、地点8)では1985年6月14日に巣立ち後間もないと考えられる新しい巣穴を地上7mに確認したが、翌年にはその巣穴の上部約1mに2個目の巣穴が造られ、さらにその翌年に2個目の上部に3個目が造られ、3年連続して営巣に利用されたと考えられた。また、営巣木中、地点22の古い巣穴のあるトドマツのみが枯木であり、残りの7本は全て生木であった。営巣木は何れも下枝がなく真直ぐにのびた高木であり、巣穴は木の傾いた側につくられており、また、営巣木の周囲は風倒、伐採あるいは道路などによって見透しがよくなっていた。

姿・鳴声は15地点で確認した。姿の目撃は、新しい巣穴(シナノキ)のあった地点8での成鳥1個体のみである。鳴声については12地点で聞かれたが、それらの地点での営巣木の確認は出来ていない。Drummingは2地点で聞かれ、そのうち地点18では古い巣穴のある営巣木(ミズナラ)を確認している。

採餌痕は10地点で確認した。営巣木との重複1カ所(地点3)、姿・鳴声との重複3カ所(地点2、17、23)を含んでいる。トドマツの樹幹部のものが8地点11本、エゾマツが1地点1本、ハルニレが1地点1本と、トドマツが採餌によく利用されている。採餌に利用されたトドマツはいずれも胸高直径40~50cmの大木である。採餌痕は長方形に大きく彫りこまれており、一例ではトドマツ(地点23)で縦68cm、幅16cm、奥行25cmに及ぶものが見られた。

ま と め

本調査で踏査できた地域は、広大な阿寒湖周辺域の限られた部分であるが、調査結果をみると、クマゲラの生息状況を示す姿・鳴声、巣穴、採餌痕などの確認記録は阿寒湖周辺に広く分散している。クマゲラは繁殖のために自然林で1番いが200~300haの広い縄張りを持つといわれる。本調査での生息確認記録の中でも、1~2kmの範囲内に隣接するものは同一縄張り内のものであろうと判断される得る場合も多い。しかしながら本調査での生息確認場所の広がりからみて、阿寒湖周辺では10番い乃至はそれ以上のクマゲラが繁殖している可能性が高いと考えられる。

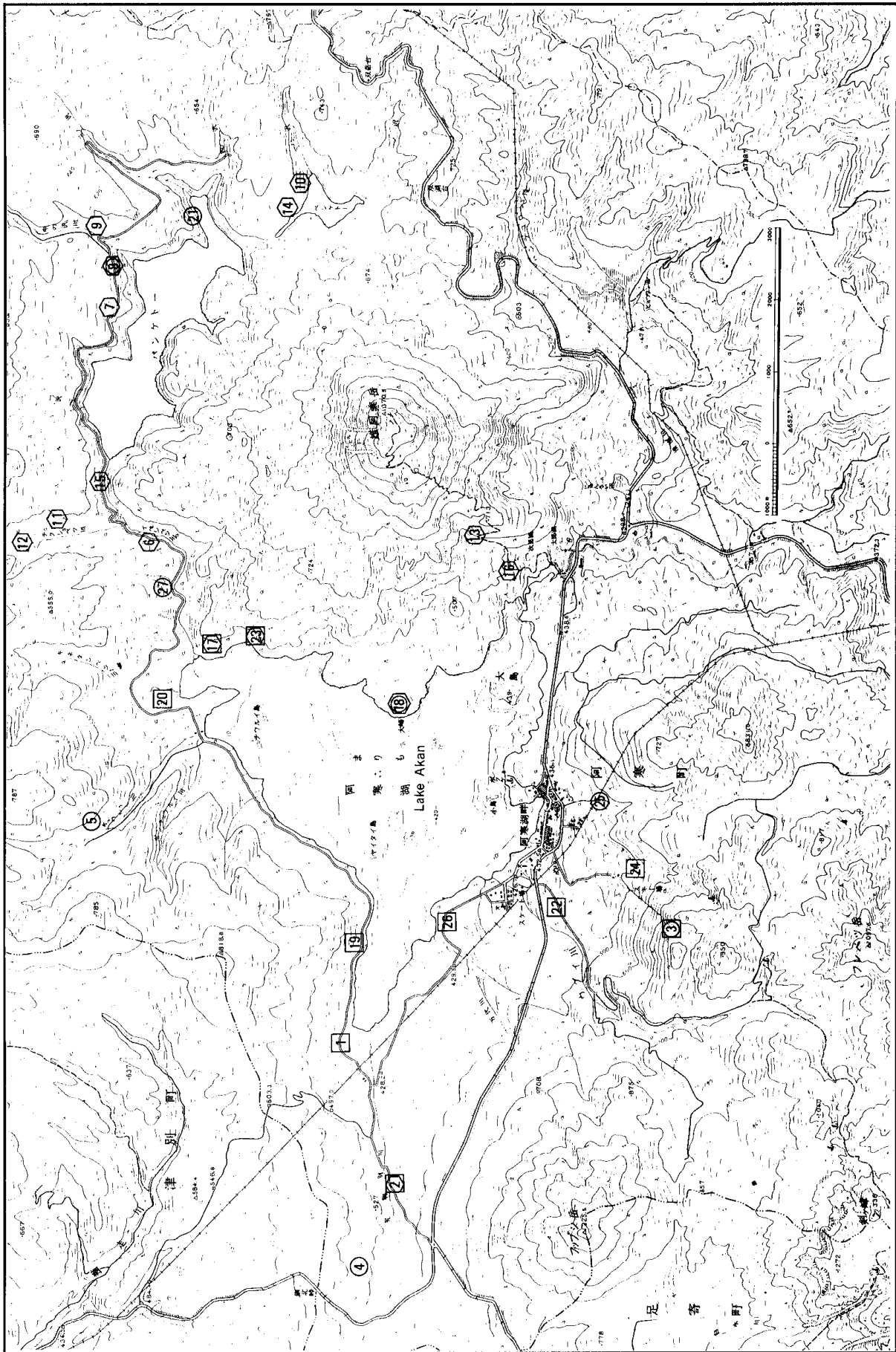


Fig.1. Map showing records of Black Woodpecker around Lake Akan, 1984—1988. Nesting tree (○). Figure, Call and Drumming (○). Feeding tree (□).

Table 1. Records of Black Woodpecker around Lake Akan, 1984-1988.

Date	Place	Figure	Call	Drumming	Nesting tree	Feeding tree	Remark
1984. 6. 27	1						<i>Abies sachalinensis</i> (トドマツ)
7. 1	2		○			○	<i>Abies sachalinensis</i>
1985. 6. 13	3					○	<i>Abies sachalinensis</i>
	4				○		New nesting hole on <i>Ulmus davidiana</i> (ハルニレ)
	5				○		Old nesting hole on <i>Betula ermanii</i> (ダケカンバ)
6. 14	6			○			
	7		○				
	8	○			○		1 Adult. New nesting hole on <i>Tilia japonica</i> (シナノキ)
	9		○				
	10		○				
6. 15	11		○				
	12		○				
8. 2	13		○				
8. 29	14		○				
1986. 3. 28	3		○		○		Old nesting hole and feeding hole on <i>Abies sachalinensis</i>
3. 29	15					○	
8. 3	16		○				
8. 5	17		○				
8. 6	8		○				<i>Abies sachalinensis</i>
	18			○	○		Newly second nesting hole on the nesting tree found in 1985
	19				○		Old nesting hole on <i>Quercus mongolica</i> (ミズナラ)
	20				○		<i>Picea jezoensis</i> (エゾマツ)
	21				○		<i>Abies sachalinensis</i>
9. 20	22				○		Old nesting hole on a broadleaf tree
1987. 3. 22	23				○		<i>Abies sachalinensis</i>
7. 12	8				○		<i>Abies sachalinensis</i>
7. 13	24						Newly third nesting hole on the nesting tree found in 1985
	17					○	<i>Abies sachalinensis</i>
10. 14	23		○			○	Dead tree of <i>Ulmus davidiana</i>
	2					○	
1988. 1. 25	25				○		<i>Abies sachalinensis</i>
	26						Old nesting hole on a dead tree of <i>Abies sachalinensis</i>
	27				○		Broadleaf tree
2. 22							Recent nesting hole on <i>Tilia japonica</i>
Number of places		1	12	2	8	10	

※ The places were showed in Figure 1.

引用・参考文献

- 有澤 浩 (1974) 北国の森の博物誌, : 7-11, 河出書房新社.
- 藤巻裕蔵 (1983) ソ連極東の鳥 3, クマゲラ・コアカゲラ・コゲラ・ミュビゲラ, 釧路市立博物館報, 281 : 3-6.
- 北海道教育委員会 (1977) エゾシマフクロウ・クマゲラ特別調査報告書, : 31-81.
- 橋本正雄 (1987) 阿寒湖地区自然環境基礎調査-鳥類-, 前田一步園財団調査研究報告, 1 : 277-294.
- 橋本正雄 (1988) 阿寒湖とその周辺の野鳥, 釧路市立博物館報, 312 : 3-8.
- 清棲幸保 (1965) 日本鳥類大図鑑 I, : 410-413, 講談社.
- 黒田長久編 (1984) 決定版生物大図鑑-鳥類-, : 190-191, 世界文化社.
- 川辺百樹 (1988) 音更川上流域におけるクマゲラの生息状況, 上士幌町ひがし大雪博物館研究報告, 10 : 37-44.
- 二村一男 (1984) 京都大学北海道演習林におけるフクロウ、クマゲラならびにアメマスの摂食物について, 釧路市立博物館報, 287 : 5-8.
- 小笠原晶 (1988) クマゲラの世界, 201pp, 秋田魁新報社.
- 小笠原晶・泉 祐一 (1977) 森吉山地域のブナ林及びその周辺におけるクマゲラの生息状況, 山階鳥研報, 9(3) : 1-13.
- 山階芳麿 (1934) 日本の鳥類と其生態 (復刻版), 第2巻, : 561-566, 出版科学総合研究所.
- 山田常雄^{ほか}編 (1977) 生物学辞典, 第2版, : 1066-1067, 岩波書店.



Fig.2. Nesting hole on *Tilia japonica* in the place (27)



Fig.3. Old nesting hole on a dead tree of *Abies sachalinensis* in the place (25)

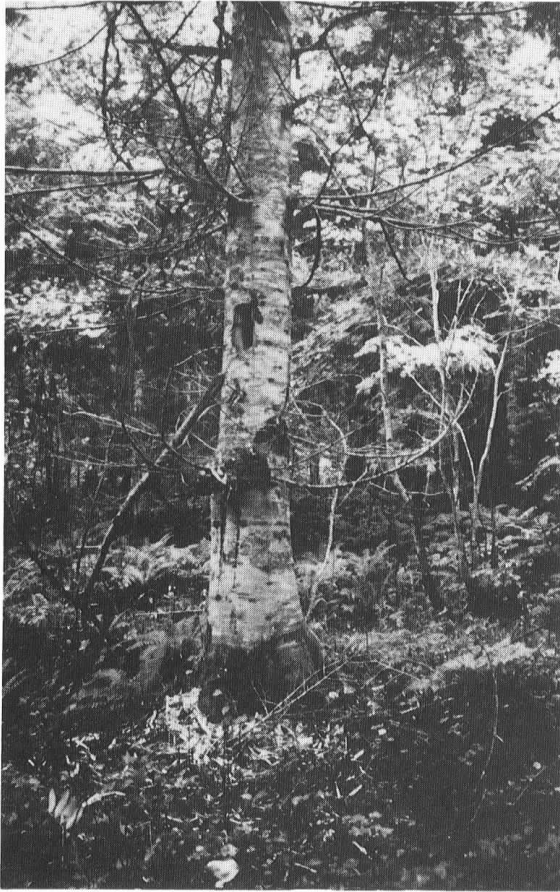


Fig. 4. Feeding hole on *Abies sachalinensis* in the place (17)

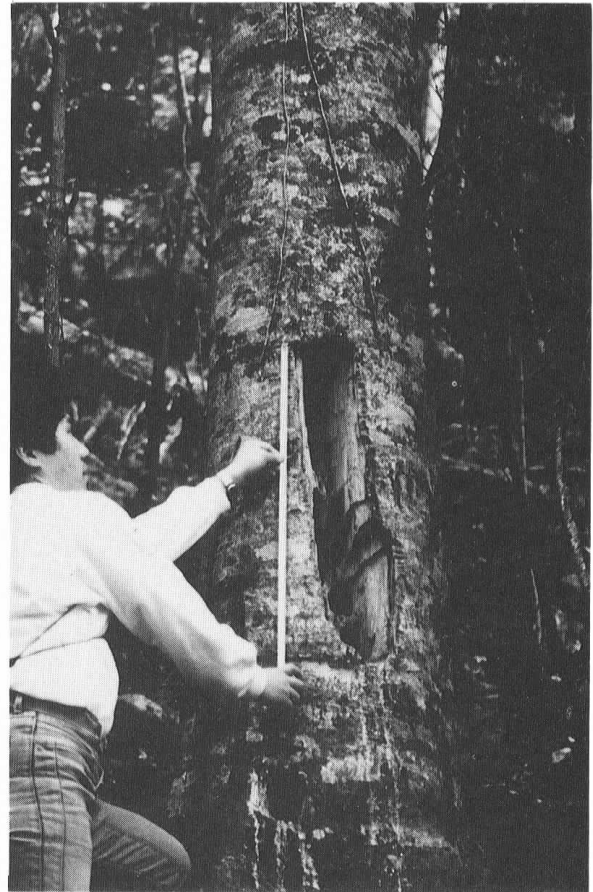


Fig. 5. Large feeding hole on *Abies sachalinensis* in the place (23)



Fig. 6. Feeding hole on a dead tree of *Ulmus davidiana* in the place (17)